

編集後記

昨 夏本誌の編集をしていた頃、世界中がこんなにも激変してしまおうとは想像すらできませんでした。疫病禍で被害に遭われた方々、今も苦勞されている方々にお見舞い申し上げます。

ギリシャは欧州の中では効果的に対策を取ったほうで、「家にいよう MENOYME ΣΠΗΤΙ」を合言葉に、感染者・死亡者数を抑え、5月にはロックダウンが解除されたそうです。ただ、もちろん経済面での復興には長い時間がかかるでしょうし、9月9日にレスボス島のモレア難民キャンプで起きた大火災は隔離措置への反発が原因とも伝えられます。(《三十年代作家》ストラティス・ミリヴィリスの故郷は、今や移民問題の最前線として大きな問題を抱えています。)

健康面のみならず、経済や政治問題から、果ては人の心の闇までさらけ出す世界規模のこの災厄は、避けられないテーマとして文学が扱うことになるでしょう。すでにミステリ文学では、自主隔離をテーマにした掌編競作集がネットで無料公開されています。

(<https://www.elsal.gr/el/anagnostirio>)

来年冬には、ウイルスの影響が少しは収まり、研究発表会で直接お会いできることを祈っております。(橘)

来 年(=2020年)の抱負は？ラジオ番組でこう尋ねられた俳優が「生き延びたい」と答えていました。covid-19というウイルスの脅威など夢想だにしなかった頃にふと耳にした言葉が、それ以降ずっと気になっていました。

新年度の開始と前後して、まさに「生き延びる」ためウイルスの感染を防止する措置が次々に取られるようになりました。不要不急の外出を避け、自粛を強いられるなか、密集を避けるために大学でも授業はオンラインでおこなわれてきました。この半年で学生も教員も「共感する場」を失ってしまった気がしてなりません。

今、スローメディアとしての文学の力が見直されています。情報の量もその収集速度も文学は到底、インターネットのようなファストメディアには敵いません。しかし病や災害等により一変してしまった日常の中で文学は不変的なものの価値を教えてくれると指摘されています。また、読み直すことができたり、ページをめくる間に考えを整理できたりするのは印刷物ならではの良さだと言えるでしょう。

力作、労作が揃った26号が「巣籠り生活」の閉塞感を少しでも軽くしてくれることを願っております。(佐藤)